

抄鳴雷

2022.5.28

軒下の看板はいい霧田気なのだけれど、外観は「カフェ」とはちょっと縁遠く、そもそも通るか、かたにびに開いていない。まるで商売っ気を感じさせない。だが、その目的を聞けば納得できる▼宇都宮市の中心部、県庁のほど近くに「カフェ莓屋」はある。引きこもりや不登校の人のケアに取り組むNPO法人KHJとちぎベリー会が2014年に開設。間もなく8年になる▼当初は食事やスイーツも提供し一般客の来店も見込んでいたが、現在のメニューはコーヒー、紅茶に軽い茶菓子があるだけ。本来の設置目的であるケア対象者の居場所的な性格が強くなっている▼落ち着いた霧田気の静かな室内。読書するもよし、おしゃべりしてもよし、ぼーっとしてもよし。訪れた人は思い思いに過ごす。しかし、腰を落ち着けられるのは午後の3時間、しかも火曜、土曜の週2日に限られる▼思うように外出できない人たちが思い立った時に気軽に立ち寄れる。理想を実現するため常時開けておくには、運営ボランティアが足りない。宇都宮市以外にも開設したいのだが、資金の問題が立ちはだかる▼小さな店構えには、社会との関係を構築するのが難しくなっている人たちが、一歩目を踏み出すための大きな可能性を秘める。資金であつたり人手であつたり、支援の輪が広がるといい。